

# 高校生活で養う課題意識・コミュニケーション力 これからの推薦・AO入試指導

昨年度は推薦・AO入試の対策・指導方法についてお伝えしました。今年度は「高校生活の中でいかに目的意識×問題発見・解決型能力を育成するか」について、実践例を含めてお伝えしていこうと思います。今号でまずは、2016年度入試をふりかえりつつ、大学側が何をしようとしているのかを探りましょう。

藤岡慎二

株式会社  
Prima Pinguino  
代表取締役

第6回

## 2016年度入試から見る これから問われる力



ふじおか・しんじ●1975年生まれ。慶應義塾大学大学院修了。数学や生物の大学受験対策を教える塾講師を経て、大学院でキャリア教育の重要性に気づき、研究を開始。小学生から社会人までを対象とした現場指導経験を有し、推薦・AO入試対策、社会人基礎力の指導や教材・プログラム開発を大手大学受験予備校や高校・大学で行う。島根県立隠岐島前高校をはじめとし、行政と協業し教育を通じた地方創生に取り組み、現在、北海道から沖縄までの高校魅力化プロジェクトに参画、高校連携型の公営塾を運営。

2016年度も始まり、今年の3年生の指導に頭を悩ませている先生方も多いのではないだろうか。今回は16年度の推薦・AO入試をふりかえり、今までの違いから、17年度の入試対策にどのように活かすか、また高校3年生に対する指導のみならず、3年間の学校生活をどのように進路指導や選択に活かすかを考えていきたいと思います。

### 2015年度までは 人物評価より活動評価の傾向

まず、15年度までの推薦・AO入試の状況と、受験者の傾向についてふりかえりましょう。

#### ① 活動を実態以上に見せる

##### 「盛った」自己PRが多かった

今までは、学外でこんな珍しい、社会的意義がある活動をした！ 他校の高校生はしないような活動をした！ 学生団体を作った！ などの

活動が入試で評価されるとの思い込みがありましたし、実際に大学にも合格していました。

活動が評価されるとわかると、高校生達は実際にした活動を「盛って」表現するか、タイトルからして見栄えの良さそうな活動を行うことで差別化しようとしています。大学でも校外での活動は意欲・関心と捉えられ、他の生徒との差別化に使われてきました。

#### ② 将来の職業を決める

##### キャリアアンカー型が多かった

志望理由書に関して、職業を決めてから志望校を決めるキャリアアンカー型が多く見られました。でも、高校生が職業を決めることは容易ではありません。大学側からも「高校生でその進路や職業にしか目が向かないと視野が狭くなり、大学での教員や友人との出会いから、新たな自身志や可能性を発見したりできなく

なる。思い込み症候群では困る」と決めるべき弊害を耳にします。

しかし、高校生は明確な目的意識で職業を決めること、だと勘違いしてしまいがちでした。無理に職業を決めようとする、職業を決めるに至った理由は、その「職業に出会い感動した」というものがほとんどです。となると「今まで数ある職業に出会ってきたはず。なぜ、その職業に？」と聞かれると答えられないことが多いのです。

結果的に志望理由に多様性がなくなり、志望理由書では選抜しにくくなるため、活動実績に注目した選抜になってしまいます。

①②ゆえに志望理由書で選抜しきれず、人物像も十分に見ることができず、結果、活動のタイトルで選ぶことになってしまったという反省は大学側にもあるようで、2016年度入試ではある変化が見られました。

図2 指導の際に生徒に伝える「人物像とは」

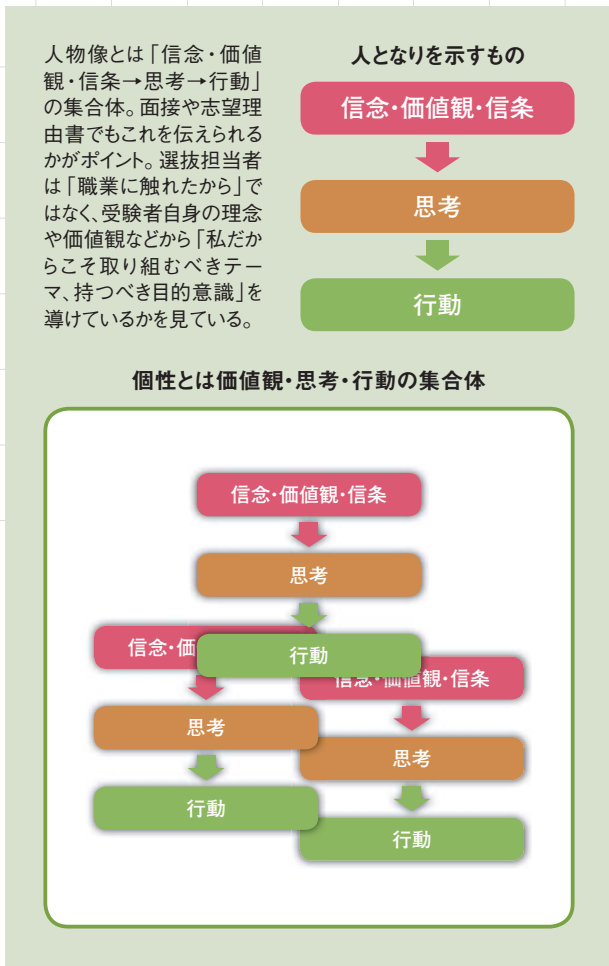


図1 2016年度合格者の志望理由書(一部)

私はインドでのBOPビジネス展開を目指す日本企業に対し、現地の事情に精通しノウハウと人脈を持つ現地NPOとの連携を仲介し、インド進出を助けたい。そのために社会課題解決を使命とするNPC(非営利型株式会社)について学びたい。

学びたいこと

この志に至った理由は、私の過去にある。私は、経験は人生の師であるをモットーに生きてきた。三つの国で10の学校に通い20以上の国籍が異なる人と暮らす困難から、私を救ったのは経験であった。私は経験を得るべく行動してきた。そんな私にとって印象深い経験はスラム街に訪れた時だ。私は、飢え・病気・死に近い人の巢窟だと想像していたが、実際は皆明るく建設的な人々だ。子供がポロポロのノートで勉強し、一方で多くの家庭がテレビを置く。私を案内した子は携帯を持つ。人々は、次世代への投資として選んでスラムに住み、教育に年収の1/4ほどを投資する。インドの圧倒的な経済成長率は貧困層にさえ希望を持たせていた。経験は自らが持つ偏見を打破し、可能性すら気づかせる。

価値観・信念を形成するに至った経緯(下線部=価値観)

この経験は、自らの偏見を正し、BOPビジネスの興味へと繋がる。学校の課題研究ではインド児童の栄養失調の調査でスラムに向かった。事情を知り、貧困層という言葉だけで2億人を一括りにはできないと感じた。

価値観・信念を物語るエピソード

しかし、私がまだ打破できていない状況がある。インドで日本企業が国際競争で勝つことだ。私の父は日本家電メーカーからインドへの進出を一任され、シェアを6倍に拡大させた。父は私の憧れであり、経営に興味を持たせた。しかし、既に大きなシェア誇る韓国企業との競争に負け、撤退した。私が通った学校における韓国人の多さが、韓国企業が成功した規模の大きさを肌で感じさせた。敗北に激しい悔しさを覚え、私は必ず日本企業を国際競争で勝たせたいと決心した。企業の国際競争で勝つ、スラムの子供を救う、をビジネスからアプローチするBOPビジネスに興味を持った。BOP(Base Of the Pyramid)は所得により3つに分類したうちの底辺だ。約40億人、5兆ドルを超える市場がある。経産省はBOPビジネスを「BOP層を対象とした持続可能なビジネスであり、現地における様々な社会的課題の解決に資することが期待される、新たなビジネスモデル」と定義している。そしてBOP層の1/3はインド人だとされている。

興味関心  
問題意識

2016年度、合格した生徒は身近なことに課題意識

16年度の入試ではいかに立派な活動にしても、内容がなければ合格は難しくなっています。活動の内容や大小に限らず、活動の中で、どのような障害・壁・試練を、どのような信念・価値観・信条の下、どのように考え、どのような行動で乗り越えたのかを問い、受験生の人物像を見抜こうとした傾向が見られました。

実際に、大学に合格している生徒の志望理由書を見てみると、誰もが安易に書きそうな貧困や震災ではなく、自分に繋がっているテーマを持ちその背景を語っています(図1)。

また、大学側も面接では問題やテーマについて、ひと通り語らせた後に「君が取り組む必然性は？」と聞く例がありました。自分のしてきた活動に基づいて自己PRするときにも「君はその活動の中で、どのような役目で、何をしたのか?」「その思考や行動の背景にある価値観は何か?」と徹底的に、受験生の人格や人となりを見るような面接になっているようです。圧迫面接ではなく、深く入り込むような質問です。もちろん、活動報告書類でも、華々しい結果

ではなく、活動のプロセスから見えてくる人となりが評価されます。私は指導する際に図2を示して理解を促し、各要素が志望理由書等に盛り込まれるようにしています。

2017年度以降の入試も地に足のついた人物が求められる?

この傾向が入試形態にも影響しています。早稲田大学初の学部横断型入試である「地域貢献型人材発掘入試」(仮称)は、地元地域への貢献に高い意識を持つ受験者に志願してもらうことが狙いです。これは高校生本人の価値観や信条を自分の足元や周囲、例えば地域の問題に照らし合わせて志を持つ人材を大学が欲している証拠ではないでしょうか。

今後の推薦・AO入試では活動内容から受験生の人となりを「信念・価値観・信条→思考→行動」、つまりヴィジョンとコンピテンシーを緻密に評価し、その受験生なりの問題意識やテーマを自らの足元や周囲から発見し、解決策を考えられる問題発見・解決能力、志を立てる能力が求められるでしょう。そして、その流れは2020年の大学入試改革における大学ごとの個別試験にも大きな影響を及ぼすと予想されます。